

第5章 書き方の形式(2)

その2 見出しの書き方

20.p157 3.副見出し

原文で副見出しが前後を棒線で囲まれている場合、棒線でつなぐだけで良いか、原文通り囲むべきか。また、本文の中に同様に書かれている場合も、同じ扱いになるのでしょうか

【A】

墨字の本で、副見出しや副書名などを棒線や波線などで囲むのは、視覚的な飾りであって、これは厳密に言えば記号類の棒線とは言えないと思います。墨字でも本や出版社によって様々ですので、点訳では、**標題紙以外は②⑤②⑤(⋯⋯)の点でつなぐことをお勧めしています。**

・八木透「出産をめぐる習俗とジェンダー ―産屋・助産者・出産環境―」
佛教大学総合研究所紀要 第15号 2008年(佛教大学総合研究所)

視覚的な飾りなので、**いらない。(副見出し、副書名などを棒線や波線で囲み)**

24.p157 3.副見出し

副題の前後の棒線ですが、後ろの棒線だけが次行に入ってしまった場合、棒線だけで1行使ってよいのでしょうか。

【A】

図書の副書名を②⑤②⑤の点で囲んで書くのは標題紙ですが、「てびき」p198 (2)にありますように副書名は書名と行を替えて書きますので、②⑤②⑤の線だけが次行に来ないようにバランスよく書きます。

奥付の副書名は、棒線をつなぎますから、後ろには②⑤②⑤の線は入れません。

なお、見出しの後ろに棒線を用いて続ける副見出しを本文中に書く場合には、「てびき」p157「3.副見出し」(1)に棒線をつなぐ方法がありますので、奥付と同様に、**後ろの棒線を省くことをお勧めします。**

『点訳フォーラム』より